BABYRON　5（第一部完結）

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＡＢＹＲＯＮ　５（第一部完結）

【Ｎコード】
Ｎ２７３６Ｍ

【作者名】
みづき海斗

【あらすじ】
そして、『全て』の『始まり』を告げる、事件が起こる――

ＢＡＢＹＲＯＮ　第一部　完結です。

BABYRON　5．拓未（前書き）

・・・何とか、第一部完結です。。。

5．拓未

夕食の買い物の帰りだった。
あの千葉の海の『変死体』事件からそう日数はたっていない。
「帰りはＰＭ１０：００かなー。」
啓の言葉を携帯で聞いて、それからＣＤとＤＶＤで時間を潰して、やっとＰＭ９：００になったから、遅めの夕食の買い物を近くのスーパーで買ってきたところだった。
人通りはもうない。
啓の家は、繁華街から少し離れたところにあるマンションだった。
ところどころにある電灯の中、貢はマンションへとレジ袋を持って歩いていた。
ふいに。
その歩みが止まる。
マンションの入り口の電灯の下で、彼女は倒れていた。
「・・・　・・・・」
貢はじっとその姿を見つめていた。
入口の白いコンクリートは、彼女の流した大量の血で色が変わっていた。
両手から――レジ袋を離す。
その時には既に、貢の右こめかみには拳銃の銃口が付き付けられていた。
「貢。」
何処かで聞いたことのある透明な声だった。
「・・・　・・・あんたが殺した（やった）の？」
貢が呟いた。「あの、『おばちゃん』。」
「そうだよ。」
冷静な声だった。「お前もいつまでもこんな所にいないで帰って

くるんだな、貢。」
「あんた――俺の事知ってるの？」
「知ってるさ。」
「どうして？」
「兄貴だからさ、お前の。」
冷たい銃口が、こめかみから離される。「だから、全部知ってる。」
「・・・　・・・・」
「またな、貢。」
背後からの青年の声が離れ、あっという間にその気配も消えた。
暫く、貢はそこから動かなかった。
やがて――横たわる女性に近づき、傍らに膝まづく。
そして。
「俺たちの番記者なんかやってるから、こういう事に巻き込まれるんだよ・・・　・・・・！」
悔しげに呟き、その血まみれのスーツ姿の女性を抱き上げる。「しっかりしろよ、梅宮キャスター！」

某全国ネットの報道記者であった梅宮　京子の死が宣告されたのは、深夜３：００を廻った頃であった。
死因はサイレンサーを使った８口径の銃による、大量出血死だと鑑定された。
『事件』が『事件』だけに報道規制はすぐにしかれ、同じテレビ局の重役たちが呼ばれただけである。
都内の某大学付属病院での出来事だった。
貢はすぐに啓に連絡し――そして、今に至る。
「何だっておばちゃんが・・・　・・・」
白いベッドの上で”眠っている”彼女をじっと見つめ、呟く貢。
そんな彼に啓は、
「俺たち、誰かさんにマークされてるらしいな。」

「誰、それ。」
「お前を『欲しがっている』奴。」
「ーーー・・・　・・・・」
貢は下唇を噛んだ。「・・・　・・・だから、啓以外の誰とも接したくなかったんだ、俺。」
「確か、『兄貴』とか言ってたんだな、その男。」
「うん。」
「心当たりは？」
「全然ない。」
頭を振る貢。啓は髪をかき上げた。
「情報が少なすぎる。」
一言、呟く。
「浅井警部。」
一人の警察官が、小さい記録用ＭＤを持って現れた。「彼女の遺留品の一つです。何かの役に立つでしょうか？」
「立つと思うよ。」
浅井は動ぜず、「再生してみて。」
テープは雑音から始まった。

ざざざ・・・　・・・・　ざざざ・・・　・・・・

『たった今、浅井警部と貢という青年のいるマンションに着きました』
「私物だね、これ。」
貢が囁く。「レポートしに来たんじゃないみたい。」
「最後まで聞こうね、貢。」
『あの大阪での銀行強盗事件を解決した浅井啓警部と謎の青年貢くんの住むマンションです――あっ！！』
そこで彼女の声は驚きに変わった。『誰か出てきました！！貢くんでしょうか・・・！！何するんですか！！』

その驚きの声が続く。『やめてください、何するんですか！！』
暫く、乱闘シーンの後。

パンッ・・・　・・・

タイヤが割れたような音がした。
ＭＤだから大きく聞こえるが、実際は小さい音だろう――夜遅くにも関わらず近所が気付かない程の。
そして――ダイイング・メッセージは終わり、全ての『始まり』を告げる声が録音されていた。
『お久しぶり、浅井警部。そして、貢。』
透明な澄んだ声だった。『今日は不在で良かったね、また来るよ。』

ざー・・・・・・　ざー・・・・　・・・

後には、ノイズだけが残された。
「仕組まれた罠だな。」
啓は呟いた。「俺たちを『挑発』するための――正確には『貢』を。」
「俺を？」
貢は眉を顰めた。「何のための。」
「お前の『力』を知ってる奴。」
啓は右手の親指を噛んだ。「たぶん、内側にも『布石』されてるはずだ――貢、俺から離れるなよ。」
「啓・・・　・・・」
いつもの『のほほん』とした啓の姿は何処にもなかった。
そこへ新たな警察官が現れた。
「浅井警部！遂にあの千葉の変死体の身元が割れました。」
「誰。」

「名前は八木拓未。元ＳＷＡＰです。」
「何だって？」
「はい――防衛大学を首席で卒業した後、ＳＷＡＰへ配属、３年後には仏の外国人部隊に理由は解りませんが入隊しています。そこでは、主に中東での活動をしていたようです。」
「それで？」
今度は貢が尋ねた。警察官は貢に視線を変え、
「米国のシークレット・サービスの任務に就いた後、行方不明となっています。」
「行方不明？シークレット・サービスを務めた人間が？」
貢は目を細め、「シークレット・サービスなら最低１０年は身元を確かめられる事になるんだぞ。」
「それがですね・・・　・・・」
その警察官は戸惑った。「謎なんですよ、本当に。経歴と言えば、ＳＷＡＰと外人部隊シークレット・サービスの所まで――後は何処にも『経歴』がないんですよ。」
「・・・　・・・」
梅宮　京子の死をめぐって、啓と貢以外に２人の警察官が加わった。
室内に沈黙が続く――
「・・・　・・・拓未・・・　・・・」
貢は呟いた。
そして、梅宮に視線を戻す――じっと、その白い顔を見つめる。

『大丈夫だよ、拓也。すぐに救出が来るって。』
『本当？兄貴。』
『うん！だってパパはこの国の”そうりょうじかん”やってるもん。身代金だってちゃんと用意してくれるよ。』
『そうだね、拓未兄貴！』

貢のその体が。
ふいに、バランスを崩した。
咄嗟に、左腕で彼の体を支える啓。
「どうした？貢。」
胸元の彼に尋ねる。
「・・・　・・・・　拓未って。」
貢は目を開けて、「俺の兄貴かもしれない。」
「え・・・　・・・・」
啓の瞳に驚きの色が走った。「思い出したのか、何か。」
「よくは解らない－－－でも」
貢は啓の瞳を見つめ、「拓未の声だよ、たぶん、あの梅宮さんのMDに入っていた声。それと、俺に拳銃を付き付けた奴－－－聞いたことあるもん。」
「じゃ、『本当』の八木拓未は」
梅宮の重役は外で控えている。
最高機密事項なので、ここにはMDを持って来た警察官と千葉での変死体の『結果』を告げに来た警察官以外、彼らの側にはいなかった。

バタン・・・　・・・

啓は少し開かれていた遺体安置室のドアを固く閉じた。
「・・・　・・・どうしてるっていうの。」
啓は呟いた。
そして、
「悪いけど、このMD俺らがもらうね、証拠品として－－－ついでに」
と、2人の警察官を見つめ、「お宅らも事情聴取、あっちでとってくれる？もう俺たちとは所轄違いの警察官呼んであるから。」
「え・・・　・・・・」

２人の警察官の顔に動揺が走るのを視線の片隅に、啓はドアを再び開けた。
「貢、家に帰るぞ。」

バタン・・・　・・・・

茫然とする２人の『情報をくれた』警察官を残し、啓と貢は安置室を出た。

あまりにも『状況』が整い過ぎている－－－
啓は貢と自宅のマンションへ車で向かいながら、いつしかそう思うようになっていた。
梅宮キャスターが言った通り、行く先々で『事件』が起きる。
そして、その事件を解決するための手掛かりを探していると、何処からかその『情報』が入ってくる。
（偶然にしてはあまりにも起承転結がはっきりし過ぎている。）
黒いハンドルを握り、早朝間近の首都高を走りながら、（まるで、チェスのようだ。こっちがビショップを置くとそれを予想していた様にキングが動く－－－肝心のクイーンは動かずに－－－いや、その『クイーン』が全てを動かしてるようだ。）
恐らくはあの釣り人たちも、何らかの形で関係しているのかもしれない。
「・・・　・・・・」
病院を出て青い車を走らせてから、啓は一言も話をしない。
「・・・　・・・・啓」
助手席の貢は気になり、「どうして、何にも言わないんだ？」
声をかけた。
「事故を起こさないようにだよ。」
いつもの、のほほん、とした口調－－－でも、前方を見つめる瞳は違っていた。

『何か』を探しているような、鋭い眼差し。
貢は時折見せる啓のそんな表情が、初めて会った時の事を思い出させる。
そう。
気がついた時には、彼が目の前にいた。
『どうして、ここに！？』
もう何年も前の事だ。
貢の記憶はそこからしかない・・・　・・・・
あの時と同じ瞳の啓が、今、ここにいる。
数ある射撃大会で優勝を網羅した、ＳＷＡＰのリーダー的存在の彼。
防衛省の指示によって、今は警視庁所属となっているがそのＳＷＡＰ
当時の『カン』や『本能』は全く変わっていない。
どこまでも事件を追い詰める啓の姿を、貢は一番良く知っていた。

そして。
『彼』はそこにいた。
「拓未・・・　・・・・？」
浅井　啓の自室で黒いスーツに身をまとった青年に向かい、貢は無意識に　呟いた。「どうして・・・　・・・死んだんじゃなかったのか？」
青年は微かな微笑を口元に浮かべ、視線は貢にではなく、
「そろそろ来る頃だと思ったよ、浅井警部。」
瞬間。
啓は腰から拳銃を抜くがそれより早く拓未が銃を発射し、啓の右肩をその弾丸が貫いた。
「啓っ！」
貢は咄嗟に啓の体を支えた。「何だよ、お前っ！目的は一体何だよ！」

青年ーーー八木拓未に向かって叫ぶ貢。
「いつまでもそんな所にいないで、早く俺たちの所へ帰って来るんだな、『貢』。」
「お前・・・　・・・・！」
貢の体が『熱く』なる。
「よせ、貢！相手の思うつぼだ！」
制する、啓。
先ほどの貢の台詞をなぞるように、目を細め、
「何を企んでるーーー大阪の事件にしてもお前たちが絡んでいただろう。
貢の記憶を奪うために。」
「思い出さない『貢』が悪いのさ。」
拓未は言った。「湾岸戦争の時の様に」
と、そこで彼は口を止めた。
「湾岸戦争？」
啓は繰り返して、「何だってそんな事を・・・　・・・」
「ふふ・・・　・・・」
苦笑とも思える微笑を拓未は浮かべた。「今は『混乱（バベル）とだけ告げとくよーーーそう、Ｇｕｌｆ　Ｗａｒ（湾岸戦争）。』
その言葉と間入れず、貢は床から啓の拳銃を拾い、拓未めがけて乱射した。

パン・・・　・・・　パン・・・　・・・　パン・・・　・・・

彼には様々な大会で優勝している啓ほどには撃てない。
乱射の反動が、両腕の重みとなって伝わってくるだけである。
「Ｃｏｍｅ　Ｂａｃｋ，　Ｓｅｅ　Ｙｏｕ．」
それだけ言うと、拓未は闇色に染まるベランダへ身を翻した。
そして、いつの間にか降りていた縄梯子を伝って、天空へと姿を消した。

残された啓の自室には、消炎の微かな香りと暫しの沈黙。
「何者なんだ。」
啓は呟き、そして傍らの貢に振り返り、
「大丈夫か、貢。」
「手が痛ぇ。」
銃を握り締めたまま答える、貢。
「ライフルじゃなくて良かったな。」
啓がのんびりと言った。「ライフルだったら、反動で肩の骨をはずす
ところだったぞ。」
「・・・　・・・かもね。」
必死に銃を手から離そうとする貢に啓がそっと手を差し出す。
そして、一本一本、指は外すのを手伝う。
「駄目だよ、貢。」
最後の人差し指をトリガーから取り外し、啓は言った。「もう、
お前には誰も殺させはしないから。」
いつもの、のほほん、とした口調に戻っている、彼。
「・・・　・・・」
「お前の戦争はもう終わり。」
微かに、啓の瞳が煌めく――「今度は、俺の戦争。」

『Ｃｏｍｅ　Ｂａｃｋ，　Ｓｅｅ　Ｙｏｕ。』

拓未は、啓に告げたのか。
それとも、貢に告げたのか。

答えは、まだ『闇』の中。

GE

END.

FIRST STA

BABYRON　5．拓未（後書き）

BABYRON　1～5までお読みの方、ご感想をお願いします。
ちなみに第二部はまだ闇の中です（自爆）。
『WOLF　MEET　VAMPIRE』のサイトUPの方が先でしょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2736m/

BABYRON　５（第一部完結）

2010年10月28日06時24分発行